

## I 研究の概要

### 1 研究主題・副題

昨年度から三年次の研究として、『やってみたい、やってみよう、もっとやりたい』と思える体づくりの実際」を研究主題とした体育学習の研究を行ってきた。二年次に当たる今年度は、副題を「環境づくりに視点を当てた授業づくり」として、指導方法の工夫・改善を中心に研究を進めてきた。

「やってみたい、やってみよう、もっとやりたい」

と思える体づくりの実際

～環境づくりに視点を当てた授業づくり～

体育学習の研究を進めるに当たり、平成24年度の3月に、本校教職員にアンケート調査を実施した。その中で、「体育学習を通して、どんな子どもを育てたいか。どのような力を付けていきたいか。」という質問に対して、「体を動かす楽しさを感じてほしい」、「基礎体力を付けたい」、「運動の幅を広げたい」という回答が、全学部から出された。また、「どのような体育学習の授業を行いたいか」という質問に対しては、「運動量を確保した授業」、「子どもの動きを引き出せる授業」という回答が多く見られた。以上のような教職員の授業に対する意識や本校の児童生徒の実態から、「児童生徒自身が体を動かすことに興味をもち、その楽しさを感じてほしい」、そして「運動量が保障でき、動きをしっかりと引き出していける授業を行ってほしい」という願いを集約し、本研究主題を設定した。

### 2 研究の計画

年度	研究主題	研究内容
平成25年度 (1年次)	「やってみたい、やってみよう、 もっとやりたい」と思える体づくりの実際	教材・教具の工夫
平成26年度 (2年次)		環境づくりに視点を当てた 「やってみたい、やってみよう、 もっとやりたい」と思える体育学習
平成27年度 (3年次)	環境づくり	

一年次に当たる昨年度は、児童生徒の実態把握を行い、指導目標や指導内容について妥当性の向上を図りながら、児童生徒が興味や意欲をもてる教材・教具の工夫に取り組んだ。そして、それらの教材・教具を用いた支援環境を整えていくために、二年次、三年次は、環境づくりに視点を当てた授業づくりに取り組むことにした。また、平成27年度開催される全国学校体育研究大会広島大会の大会主題の決定を受けて、その研究主題を「環境づくりに視点を当てた『やってみたい、やってみよう、もっとやりたい』と思える体育学習」とすることにした。

### 3 昨年度の研究成果と課題

#### 成果

- ・ 児童生徒の興味や意欲が高まるように教材・教具の開発、工夫を行った結果、自ら進んで取り組む姿が見られた。

#### 課題

- ・ 児童生徒が自ら分かって動けるための支援環境を整理し、工夫する。
- ・ 評価方法を考案し、検討する。
- ・ 運動量を増やし、質を高める取組を行う。

#### 小学部 2年生 ウルトラグループ 体育科「動物園にレッツゴー」

何か物を持つことでしっかり両手が伸びるのではないかと考え、一番両手がしっかりと伸びた棒を使用することにした。



棒を持つことで、体の上方に真っすぐ両腕を伸ばすことや、そのまま左右へ倒れ体側を伸ばす動きができるようになった。また、両腕や体側を伸ばす姿勢を一定時間保つことができた。

#### 小学部 5年生 ウルトラグループ 体育科「プールでGO!GO!GO!」

安心して浮く感覚を味わわせたり、楽しく水流を感じられるようにさせたりするために、大きめの浮き具を用意し、教師が引っ張るようにした。



教師に引っ張ってもらい、水面を進む活動に楽しさを感じるとともに、大きな浮き具で体が支えられ、安心して水の中で力を抜いて浮く感覚を味わうことができた。

#### 中学部 わくわくグループ 保健体育科「サーキットをしよう」

踏み出しやすくするために、足形を設置、前へ進んでいく見通しがもてるように、ゴールに好きなキャラクターの表示を設置した。



教師が手を添える支援を繰り返すと、進行方向を向いて台の上を最後まで歩くことができるようになった。また、キャラクターに興味をもち、ゴールまで進もうとする意欲が向上した。

中学部 きらきらグループ 保健体育科「感じよう身体・揺れ・音・光」

視覚や音、風を感じられるように、ひもを引くと上からボールが落ちてくる仕掛けを製作した。



ボールが落ちてくる前から期待して笑顔になったり、繰り返し操作を楽しんだりする様子が見られた。

高等部 1年生 単一I類型 保健体育科ダンス「リズムダンス」

集団への参加を促すために、ダンスの際に鈴付きロープを用い、親しみある曲を使用した。



教具や活動に興味をもち「やりたい」という気持ちが強くなり意欲が向上した。ロープを持つことで、模倣が難しい生徒も集団に参加しているという意識をもつことができた。

高等部 1年生 重複IB類型 保健体育科「友達をつくろう」

上体が前傾して、頭が下がるため、座位で体幹を保持することが難しく、少しでも長く保持するため、腕を支える補助用具を使用した。



自分で体幹を保持することができ、バーを握り続ける時間が延びた。自分でできることに喜びを感じ、頭を起こそうとする姿が見られるようになった。

#### 4 研究の目的

児童生徒の活動への意欲を高め、体力の向上を図るために、環境づくりに視点を当てた体育科・保健体育科または自立活動の授業の在り方を明らかにする。

##### 学校教育目標

児童生徒の自立と社会参加を目指し、一人一人の力を伸ばして、主体性をもって豊かに生きる人間を育てる。

##### 目指す子ども像

明るく 元気に たくましい子ども

##### 研究主題

「やってみたい、やってみよう、もっとやりたい」と思える体づくりの実際  
～環境づくりに視点を当てた授業づくり～

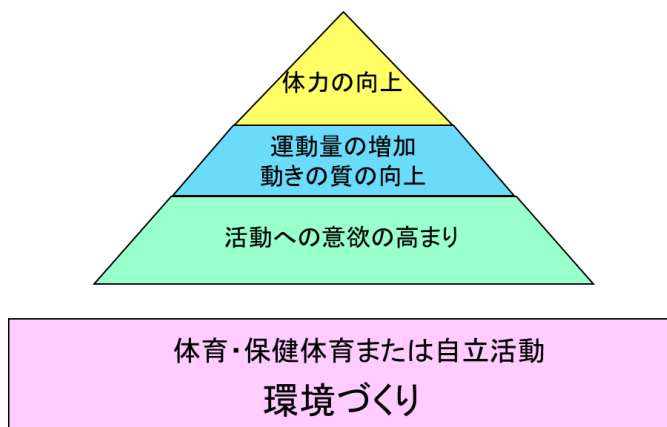


図1 研究の方向性

図1は、本校の学校教育目標及び目指す子ども像とともに、研究主題、研究の方向性を示している。研究の方向性として、児童生徒の「やってみたい」「やってみよう」「もっとやりたい」という活動への意欲の高まりが、運動量の増加や動きの質の向上へとつながり、体力の向上へとつながることを示している。

授業において、児童生徒が「やってみたい、やってみよう、もっとやりたい」と興味や意欲をもって、主体的に活動に向かうためには、子どもの内発的な動機付けや、動きや活動に対する理解が必要である。そのために、環境づくりに視点を当てた指導方法の工夫を行うことが不可欠である。このような授業の在り方を明らかにすることを、研究の目的としている。

なお、体育科・保健体育科を中心に研究を進めているが、本校で実施している類型において、重複IA類型については、教育課程上、指導形態として体育科または保健体育科を履修していない生徒がいるため、そのことを考慮し、体育科や保健体育科に限らず、自立活動の身体の動き等の内容も含めて研究を進めている。

## 5 研究仮説

体育科・保健体育科または自立活動において、環境づくりに視点を当てた授業づくりを行うことによって、児童生徒の活動への意欲が高まり、運動量の増加や動きの質の向上が見られるであろう。

図1にあるように、活動への意欲の高まりが、運動量の増加や動きの質の向上につながるという解釈から、仮説の検証は、環境づくりと運動量や動きの質の関係に焦点を当てて、分析していくこととした。

## 6 研究方法

### (1) 研修計画

研究の目的を達成するため、以下のように、①校内で理論研修を行い、②授業づくりの実践に生かし、③評価シートや実践の記録をもとに、仮説の検証を行った。

#### ① 理論研修

○ 環境づくりや、体育科・保健体育科または自立活動について、理論的な研修を行い、共通理解を図る。

- ・ 「わかる・できる・かかわり合う」体育学習  
安田女子大学教育学部児童教育学科 教授 徳永隆治先生
- ・ 『「やってみたい、やってみよう、もっとやりたい」と思える体づくり  
～環境づくりの整理と実際～』  
上越教育大学大学院学校教育研究科 准教授 村中智彦先生
- ・ 「重度重複障害児童生徒の体育・保健体育と自立活動の捉え方、指導内容や指導方法の工夫について」  
広島県立福山特別支援学校 指導教諭 川口辰之進先生

#### ② 実践研修（環境づくりに視点を当てた授業づくり）

○ 環境づくりに視点を当てた体育科・保健体育科または自立活動の授業づくりを進める。

- ・ 授業づくりシート、評価シートの作成（各学部研修会）
- ・ 付けたい力、指導内容の交流（スーパー学部研修会）
- ・ 環境づくりの整理（各学部研修会）
- ・ 評価シートを基に、児童生徒の動きの質と運動量を評価（各学部研修会、公開授業研究会）

#### ③ 仮説の検証

○ 評価シートを用いた運動量の増加と動きの質の向上を検証する。

- ・ 実践の記録の作成と紹介（各学部研修会）
- ・ 取組についてのアンケートの実施（各学部研修会）

## スーパー学部研修会

- ◎ 全校を4つの縦割りグループに分け、各グループの児童生徒の実態に合わせた「付けたい力」と体育科・保健体育科または自立活動の指導内容の整理をする。
- ◎ 公開授業研究会での授業観察、研究討議を通して、各学部、学年、グループの指導内容や指導方法について意見交流をし、今後の指導、実践に生かす。

今年度より取り組んだスーパー学部研修会は、児童生徒を実態別に4つのグループに分けて行う、小・中・高等部合同の縦割りの研修会である。その中で児童生徒の実態に応じた「付けたい力」と、体育の指導内容や大切にしたい視点について系統的に整理することを目的として研修を進めた。

各学部の「付けたい力」、指導内容について、共通理解を図りながら、具体的な指導方法を検討し、研究の質を高める場として活発な意見交流を行うことができた。

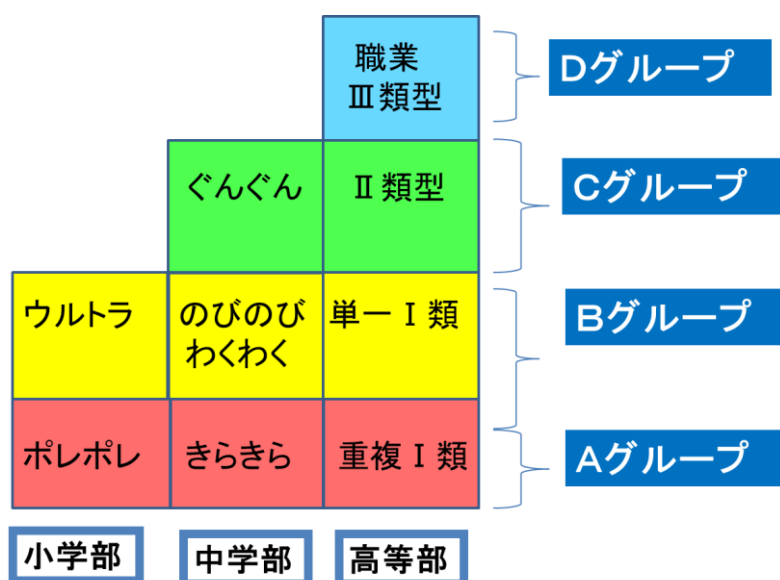


図2 スーパー学部研修会 グループ図

スーパー学部研では、図2のような4つのグループ分けで、研修を行ってきた。

Aグループは、重度の肢体不自由を併せもつ児童生徒のグループであり、小学部ではポレポレグループ、中学部はきらきらグループ、高等部は重複ⅠA類型、重複ⅠB類型となる。

Bグループは、主に単一Ⅰ類型で構成され、加えて重複の中でも自力歩行ができるなど、比較的自分から移動することが可能な児童生徒のグループであり、小学部ではウルトラグループ、中学部はわくわくグループ、のびのびグループ、高等部は単一Ⅰ類型となる。

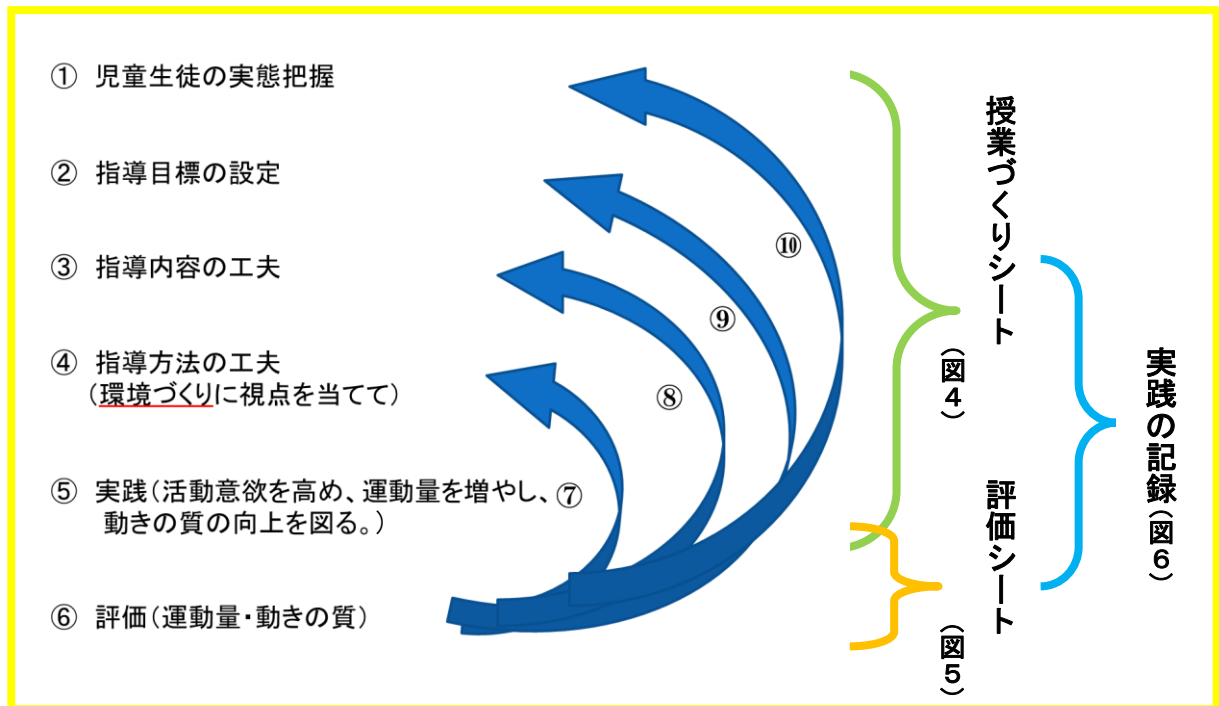
Cグループは、Ⅱ類型の生徒と、Ⅰ類型の中でも、言葉での指示で動くことや、ゲーム性のある運動をすることができる生徒が比較的多いグループであり、中学部ではぐんぐんグループ、高等部はⅡ類型の生徒となる。

Dグループは、高等部Ⅲ類型と、職業コースの生徒となる。

## (2) 授業づくりの手順

本研究の授業づくりの実践は、以下の手順で行った。(図3)

図3 授業づくりの手順



新体力テスト、本校体力テスト、発達段階別指導内容一覧表等を用いて①児童生徒の実態把握を行い、②指導目標の設定、③指導内容の工夫を行う。④指導方法の工夫については、環境づくりに視点を当てて取り組む。⑤実践（活動意欲を高め、運動量を増やし、動きの質の向上を図る）をし、⑥評価（運動量・動きの質）をした後、必要に応じて⑦、⑧、⑨、⑩とフィードバックしていきながら、授業を行っていく。

これらの手順は従来作成してきた個別の教育支援計画、個別の指導計画ⅠⅡの作成の手順と同様である。今年度の研究では、さらに体育科、保健体育科または自立活動の取組の経緯を表にして、「付きたい力」を元に、実態、指導目標、指導内容、指導方法を整理し、成果と課題を明確にするため、「授業づくりシート」(図4)を作成した。

また、指導目標に挙げた運動を、具体的な動きで詳細に捉え、児童生徒個人の姿を、動きの質の向上に視点を当てて評価するため、「評価シート」(図5)の作成も行った。

さらに、指導始め、中間、終わりの3回を目安に継続的に評価し、児童生徒の動きの質や、運動量に変容したかどうかについての検証を行った。各学年・グループで抽出した児童生徒の動きの質や運動量の変容を、評価シートから見取ることと、実践した環境づくりを具体的に振り返ることをねらって作成したものが、「実践の記録」(図6)である。